日本人英語学習者の語彙習得とコーパス

塚本倫久

Abstract

My aim in this paper is to argue that English learners in Japan should pay particular attention to learning vocabulary. In language acquisition, passive and active vocabulary should be distinguished. It is important for learners to increase their active vocabulary for spoken and written English. In order to become proficient they must have a sure grasp of such aspects of vocabulary as collocations and lexical phrases. In the past, teachers and learners have had to rely on their limited knowledge and intuition. Now however, we have a computer corpus that provides objective information about the English language in use.

0. はじめに

本シリーズのテーマは「日本人の間違えやすい外国語」であるが，英語に関してその種の話題はこれまでもあちこちで取り上げられているので，本稿では語彙習得の観点から日本人の英語学習者がどのようなことに気をつけて学習したらよいかをコーパス(The Bank of English 2001年7月現在，4億1844万9873語）から得られるデータをもとに考えることにしたい。

言語習得における語彙はある語に接したときに理解できる受容語彙（receptive vocabulary）／認知語彙（passive vocabulary）と自ら使うことができる発表語彙（productive vocabulary）／運用語彙（active vocabulary）に区別される。発信型の英語で必要になるのは発表語彙をいかに増やすかである。語を使いこなすためには語がどのような語と連結して用いられるか，語の振る舞いに習熟する必要がある。近年目覚しい発展を遂げているコンピューター・コーパスはその点で語彙習得の分野においても多大なる貢献をするものと思われる。すでに*LDOCE, COBUILD, OALD* などのコーパスを利用した EFL 辞書が明らかにしたように，コーパスから得られる頻度情報，lexico grammatical な情報は L2学習者の習得語彙について有益な情報を提

供してくれる。

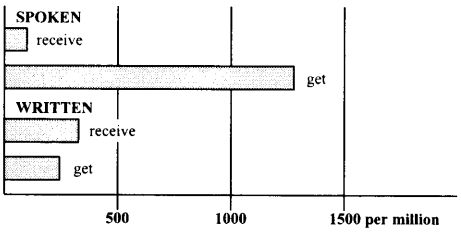
1．基本語彙とコーパス

英語学習の過程で，しばしば基本語彙○○○○語といった語彙が提示される。文部科学省の学習指導要領では，中学校で900語程度，高等学校の英語Ⅰでは「中学校で学習した語に400語程度の新語を加える」，英語Ⅱでは英語Ⅰに示す新語の数に「900語程度までの新語を加える」としており，中学高校合わせて2200語程度を学習するように定めている。基本語彙の概念についてはCarter（1998）が‘Syntactic Substitution’，‘Antonymy’，‘Collocability’などの観点から10種類に分類していて参考になるが，ここではコーパスとの関連からこれまで基本語がどのように統計的に分析されてきたかを概観しておく。

L2基本語彙リスト作成の歴史はHarold E. Palmerの*Second Interim Report on Vocabulary Selection*（1931），Thorndike and Lorgeの*The Teacher's Word Book of 30,000 Words*（1944）などに溯るが，特に注目されたのはMichel Westによる*A General Service List of English Words*（1953）である。これは教授者のために初歩の学習者に必要な2,000語を選定し，アルファベット順に各語の意味と例文を載せたものであった。それをもとに基本2,000語で語義を説明する辞書として生まれたのが*Longman Dictionary of Contemporary English*（1976）である。改訂版（1995）ではBritish National Corpusを用いて，基本3,000語を話し言葉と書き言葉に分類し，最も使用頻度が高い語から1,000語ずつS1，S2，S3，W1，W2，W3（SはSpoken，WはWrittenの略）のように表示している。さらにそのうち150語についてはfrequency graphも表示している。たとえば，receiveを引くとS1，W1の表示があり，いずれも高頻度で用いられ，frequency graphからは書き言葉ではreceiveがgetより優勢であるが，話し言葉ではgetの方が圧倒的に多く使われることがわかる。

S1 W1 **re·ceive** /rɪ'siːv/ *v* [T]
1 ▶ **BE GIVEN STH** ◀ to be officially given something: *We have received numerous complaints about the airport noise.* | **receive sth from sb** *In 1962 she received an honorary doctorate from Harvard.* | *You may be entitled to receive assistance from the state.* —see OBTAIN (USAGE)

Frequency of the verbs **receive** and **get** in spoken and written English.



また，*COBUILD*（1995）はThe Bank of Englishのデータをもとに高頻度の語彙を5段階のbandで示している。黒の◆5つで700語，4つで1,200語，3つで1,500語，2つで3,200語，1つで8,100語。ちなみに，前述のreceiveはband5の最も高頻度語彙に分類されている。

receive /rɪsiːv/ **receives, receiving, received** ◆◆◆◆◆
1 When you **receive** something, you get it after someone gives it to you or sends it to you. *They will receive their awards at a ceremony in Stockholm... I received your letter of November 7.*
VERB
:-get
V n

COBUILD の解説によれば，上位 2 つの bands（1,900語）ですべての英語使用の約75％をカバーするとしている。(The words in the top two bands account for approximately 75% of all English usage — so their importance is obvious. — *COBUILD* xiii）この統計は基本語の学習がいかに重要であるかを示すものであるが，3 章以下で述べるように，基本語を学習する際，何を知ってなければならないかという質的な問題と合わせて考えなければならない。

一方，英和辞典に目を向けると，ほとんどの辞書が基本語彙を＊などの記号を用いて表示している。その中で頻度表示を統計資料から明確に示したものとして注目されるのは『ニュープロシード英和辞典』(1994)（以下，『プロシード』）である。「英字新聞や雑誌，日常会話やビジネス用語，テスト，教科書，日本人の誤りやすい語，新語等を含む 6 分野72編の素材，のべ131万7,642語を新たに収集分析し，その結果択られた 4 万7,066語の異なり語のうち頻度の高い上位5,000語を「新キーワード5000」として」重要語に定めている。

上述のように最近ではコーパスの頻度情報をもとに基本語を定めることが主流になっているが，客観的な情報が得られる反面注意すべきこともある。そのひとつはコーパスの質に関わる問題である。*COBUILD* と『プロシード』の頻度情報を調べると次の事が明らかになる。The Bank of English をデータベースにしている *COBUILD*（1995）は，最も頻度の高い band5（基本700語）の分類の中に prime minister, secretary, stock, charge, fund, billion, yeah, er など，band4（基本1200語）には Senegalese, Tunisian, Byelorussian, prison, gay などが含まれている。政治，経済，社会問題のいくつかの語彙が特に高頻度を示しているのは The Bank of English が新聞や放送から多くの資料を取っていることと関係がある。また，資料の70％がイギリスの資料であることから，イギリスと関わりの深い国名などに関する語彙が上位に来ている。yeah, er は口語のサブコーパスに現れる頻度が極端に高いことを示している。このような *COBUILD* の語彙はイギリスに生活していれば日常頻繁に接する語彙であるが，教室で必須語彙である pencil, blackboard, eraser を調べると pencil は band 2, blackboard は band 1, eraser は頻度表示語彙の枠内に含まれていない。また，学習上おぼえておかなければならない体の部位をあらわす shin, eyelid, eyelash も band 1である。*COBUILD* の頻度情報は，たとえば日本人中学生のような初歩の学習者にとって学習段階で必要な語彙レベルとコーパスのデータが必ずしも一致しているとは言えない。

その点に関して，『プロシード』ではキーワード5000語について 5 段階で示した頻度ランクのグラフに加えて学習ステップと称する学習段階のレベルを設けている。『プロシード』は基本的な語から難しい語へステップ 1 からステップ 5 の 5 段階で表示し[1]，実際のコミュニケー

ションにおける頻度と学習の環境で用いられる語のレベルを区別することにより学習者への配慮をしている。前述の pencil, blackboard, eraser をみると pencil は頻度ランク 4，学習ステップ 1 。blackboard, eraser はともに実際のコミュニケーションにおける頻度ランクは低いが，学習ステップは 2 「幼児・児童でも必要とする基本的な生活語」として位置づけられている。逆に privilege, software, user は日常的な場面での頻度ランクはかなり高いにもかかわらず学習ステップは 5 で学校の教科書以外で「一般によく用いられる語」の範疇に分類されている。

キーワード5000		学習ステップ	頻度ランク 低←→高
pencil	鉛筆	step 1	
blackboard	黒板	step 2	
eraser	消しゴム	step 2	
privilege	特権，特典	step 5	
software	ソフトウェア	step 5	
user	使用者	step 5	

このようにみてくると，priviledge, software, user のように内容語（content words），特に社会的 context で使われる語彙の中には日常生活での頻度は高いが学習環境における語彙としてのランキングではあまり高くないものが含まれていることがわかる。学習者用の語彙リスト作成には学習語彙と日常語彙のバランスを考慮したコーパスの構築が必要になろう。

また，口語と文語，アメリカ英語とイギリス英語では語彙の現れる頻度に違いがある。学習者用のコーパスの構築にはこのような点も考慮されなければならない。

2. lexis と grammar

言語学の流れの中で，語彙と文法の関係を同等に扱ったのは Firth の流れを汲む Halliday を中心とする機能文法家たちであった。Halliday の systemic grammar では言語の形式（form）を grammar と lexis の 2 つのレベルに分け，それぞれの syntagmatic [chain] と paradigmatic [choice] の関係を次のように示している。

	chain （連鎖）	choice （選択）
grammar （文法）	structure （構造）	system （体系）
lexis （語彙）	collocation （連語）	set （集合）

grammar は「単数と複数」，「過去・現在・未来」，「肯定と否定」などを定められた文法規則の中で選択するのに対し，lexis はたとえば ‘he was sitting there on the…で始まる節で，…の

箇所に ‘chair’, ‘settee’, ‘bench’, ‘stool’ など無制限の選択肢が出現する可能性がある。そこで前者を「閉ざされた選択」(closed choice), 後者を「開かれた選択」(open choice) と呼び, 閉ざされた選択における可能性の範囲を体系 (system), 開かれた選択における可能性の範囲を集合 (set) として区別した。(Halliday, McIntosh, Strevens 1964)

1960年代以降, 言語研究は Chomsky を中心とする文の統語構造の分析が主流となり, lexis についてはあまり論じられなかったが, 近年大規模コンピュータ・コーパスの構築により, lexis のさまざまな特徴が明らかになり, この分野の研究が新たに注目をあびることになってきた。

これまでの英語教育で語彙の指導がどのように行われてきたかを検証しておくと次のようになろう。語や熟語の意味を知り, context のなかで理解できるようにすること, 動詞の活用形, 派生語, 反意語, 同意語の知識があること, spelling が正しく綴れること, 正しく発音ができることなどである。発信型の指導を重視する場合は, さらに語の文法的な振る舞い, 語と語の結びつきを知っていること, 語を適切な場面で使える知識があることなどをあげることができる。語を知っていることは, どういうことかについて Carter (1998; 232) は, “knowing a word involves knowing how to use the word *syntactically, semantically* and *pragmatiacally*.” と述べている。つまり, 単語を知っているということは能動的にそれを適切な場面で使えることを意味している。

近年の心理言語学 (phycolinguistics) では, ネイティヴ・スピーカーは膨大な量の語彙をカテゴリー別に記憶していて, 場面に応じて適切な語彙を瞬時に取り出すことができる膨大な数の結合が複雑な網のなかに組み込まれていると考えられている。(Aicthson 1998) また, M. Lewis (1993) は native speaker は数多くの lexical chunks を身に付けていて, これが表現を native らしくしているとしている。そのような lexis の特徴のいくつかをみておく。

たとえば, コーパスで dangerous を検索すると27024例中7768例 (4例に1例) が危険の程度をあらわす副詞とともに, 副詞＋ dangerous の連結で用いられることがわかる。次はその picture の画面[2]であるが, dangerous は, 頻度順に *more / very / too / potentially / most / extremely / so / less / highly* dangerous のように用いられている。

RB+dangerous[3]

it	is	more	NODE	to	the	the
is	a	very	NODE	and	of	to
and	s	too	NODE	than	a	a
s	be	potentiall	NODE	for	in	and
was	and	most	NODE	as	it	is
to	was	extremely	NODE	<p>	and	in
be	are	as	NODE	in	<p>	it
are	the	so	NODE	the	to	of
can	far	not	NODE	but	is	be
would	were	less	NODE	it	for	<p>
they	as	highly	NODE	because	that	that
that	even	particular	NODE	situation	he	are

he	an	how	NODE	he	they	was
of	just	even	NODE	i	i	as
could	much	really	NODE	if	was	s
in	but	always	NODE	they	we	he
a	not	quite	NODE	that	you	i
as	no	increasing	NODE	when	said	on
the	potentiall	downright	NODE	place	on	not
world	it	also	NODE	man	are	for
this	of	still	NODE	a	but	have
britain	become	often	NODE	so	this	they
which	or	sometimes	NODE		as	but

"it". Tot freq:3771509. Freq as coll:646. t-sc:22.6619. MI:3.2062. `?' for help

頻度の高い副詞は比較級，最上級を表す more, less, most と程度の副詞に分けられる。ネイティヴスピーカーは聞き手に危険性を印象づけるために，無意識のうちに程度の副詞を補っていると思われる。ネイティヴに近い自然な表現を身につけるためには，このような語と語の繋がりに精通する必要がある。

また，語の連結の程度に差がある場合にその語感を養うのは日本人の学習者にとって難しい。absolutely＋形容詞の collocation と頻度を次に示す。absolutely は right (841) / fabulous (519) / necessary (448) / sure (392) / certain (370) / brilliant (365) / essential (362) といった形容詞と高い頻度で結びつくが，happy (11) / different (10) / good (7) といった形容詞と連結する頻度は極めて低い。

さらに語彙がとるパターンの固定化の程度にも違いがみられることがある。たとえば，do [perform / carry out] one's duty「義務を果たす」では最初の部分の動詞を入れ替えても意味は変わらない。as dark [black] as pitch [night / coal / ink]「真っ暗」では 2 ヵ所を入れ替えることが可能である。しかし，kick the bucket「死ぬ」は固定化したフレーズでいずれの語も他の語と置き換えることはできない。

コーパスは次のような語彙の特徴を明らかにすることがある。動詞 admit をコーパスで検索すると admit は後に「(好ましくない事態を) 認める」という文脈でしばしば用いられることがわかる。

Privately, the building societies now	admit	that this figure could be as high
jarred with the announcement to	admit	animals. There's been some quick
English have always been reluctant to	admit	that there is an Irish problem.
tackling a DIY job. More than a third	admit	they worry whether they are up to
But those close to him freely	admit	that Williams desperately wants
wants to beat you. I must	admit	I don't particularly enjoy being a
to come through just as the Germans	admit	that unification costs could drive
Even sacked dad Stefano had to	admit:	`Maybe until she's eight or nine
</h> WHY doesn't Brian Moore	admit	he's a bad loser? Wales deserved to
of a row since he was forced to	admit	the amendments put forward by
goes to children. Mr Lilley did	admit	that the CSA - now the most
I want to do to you. Submit,	admit	you are desperate for a date."
our arrangements." <h> NatWest	admit	it at last # we're not that good
four years ago, police officers	admit	they were stymied by the need to

said: `The Government should admit that this ill-thought-out and
company in 1993, he is the first to admit that drink had taken him to a very
Gump swore. But even he has to admit that being greeted by screaming
prisons track-record would be to admit the Government was wrong to appoint
its fiercest critics are having to admit that the massive privatisation has
are more similar than he'd like to admit." <p> The Glass Menagerie opens at
bound Middle East reporter, and I admit that I expected little joy of it.
is strange as the ingredients only admit to potatoes and oil. The other
Long before I was finally obliged to admit to myself that I was bored by the
Line 1 of 1000. Corpus today/UK. Text <tref id=N6000911205>. `?' for help.

コンピュータ・コーパスの出現以前にはL2，特に日本人の学習者にとってlexisのこのような特徴について，細部にわたって客観的な情報を得ることには限界があった。

上述したようにsyntaxはclosed choiceであるため，たとえば時制に関して，未来を表現するのに，現在形，現在進行形，助動詞will / shallのいずれを使って言うか，関係代名詞においてwho, thatのどちらを使うかという選択は文法規則を習得すれば比較的容易である。一方，語彙のふるまいはopen choiceであるため，collocationの頻度や語のパターンは多様で日本人学習者にはどのような語彙を選択すべきかはわかりにくい。語の文法的な振る舞い，語と語の結びつきはこれまで教授者，学習者の言語知識と直感によっていた。しかし膨大なデータをもとにしたコンピュータ・コーパスの構築により，語の頻度やパターンなどについて客観的な語彙情報を得られるようになったと言える。言語の習得には構造的なsyntaxの知識とあわせてlexisの知識がなくてはならない。

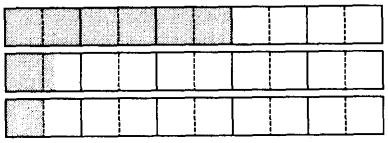
以下，語彙習得において有益と思われる興味深い事例について，コーパスの資料をもとに検討する。

3. collocation

Benson（1985）はcollocationをgrammatical collocationとlexical collocationに分類する。grammatical collocationはとくにadhere to (something), ambassador to (a country) などのように主要語（dominant word）である名詞，動詞，形容詞が前置詞あるいは不定詞，節のような文法的構造を従える連結である。一方，lexical collocationは形容詞＋名詞，名詞＋動詞，動詞＋名詞のように従属的な要素がなく，同等の語彙構成要素からなる連結を表す。

grammatical collocationに関しては，たとえば，believeを『ジーニアス英和辞典（1994）』で調べるとSVO, SVO (that) 節，SVO to be Cのように，believeのとる型が示されている。例文には，「I ～ (*that*) he is kind. =（(やや正式)）I ～ him *to be* kind. 彼は親切だと思う。/ *It is* ～ *d* [*They* ～] that she is kind. =（(やや正式)）She is ～ *d* to be kind.」の書き換えも示されている。コーパスを検索するとbelieveはほぼ次のような割合で3つの主な型に分類することができる。

believe (that) 節　60%
believe＋名詞・代名詞　12%
believe in 名詞・代名詞　10%



さらに，believe (that) 節の主な型は頻度順に次のようなタイプに分類できる。

I [we] believe (that) 節

I [we] don't believe (that) 節

We can't believe (that) 節

It's hard [difficult] to believe (that) 節

Don't believe (that) 節　—spoken

『ジーニアス英和辞典』の書き換えに示されている型について written, spoken を考慮に入れながら検証すると，believe＋名詞・代名詞＋ to＋ be（believe@＋ NOUN | PRO＋ to＋be）[4]は590例（believe 全体の0.3%）見出され，全体としては頻度は高くない。サブコーパスごとの100万語あたりの頻度数は，British Books, Times Newspaper, Independent, Newsicentist などが上位にきており written，それも formal な文体で用いられることがわかる。

Corpus	Total Number of Occurrences	Average Number per Million Words
brbooks	126	0.7/million
times	67	0.5/million
indy	58	0.5/million
newsci	14	0.4/million
usbooks	54	0.4/million
guard	50	0.4/million
econ	21	0.3/million
bbc	23	0.3/million
brmags	52	0.3/million
usacad	7	0.3/million
today	29	0.3/million
oznews	37	0.3/million
usspok	2	0.2/million
brephem	4	0.2/million
usnews	8	0.2/million
sunnow	25	0.2/million
usephem	2	0.1/million
npr	8	0.1/million
brspok	3	0.0/million

Hit any key to continue...

She is believed to be kind. の型では is / was believed to be 形容詞（is | was＋ believed＋ to＋ be＋JJ）[5]は276例（believe 全体の0.15%）見出され，サブコーパスごとの頻度数をみると，

British Spoken, US Spoken の出現数は 0 。このパターンもきわめて低い頻度で用いられ Times Newspaper, Independent, Guardian など高級紙における formal な文体で用いられることがわかる。サブコーパスではオーストラリア英語にこの型が多いのが注目される。

コーパスを検索することにより，詳細に語の言語使用を知ることができる。

Corpus	Total Number of Occurrences	Average Number per Million Words
oznews	59	0.4/million
times	46	0.4/million
indy	30	0.2/million
guard	31	0.2/million
bbc	16	0.2/million
usacad	5	0.2/million
usnews	7	0.2/million
brephem	3	0.2/million
sunnow	16	0.1/million
npr	10	0.1/million
brbooks	17	0.1/million
econ	6	0.1/million
usbooks	11	0.1/million
today	9	0.1/million
newsci	2	0.1/million
brmags	8	0.0/million
brspok	0	0.0/million
usspok	0	0.0/million
usephem	0	0.0/million

Hit any key to continue...

次に lexical collocation についてみる。まず日本人学習者にとって collocation で躓く大きな原因は母語による干渉である。たとえば「鼻が高い［低い］」'long [short] nose' を日本語に影響されて 'high [low] nose' と言ってしまうことがある。「眉をひそめる」'raise one's eyes' のように発想の異なるもの，「薬を飲む，コーヒー・お茶を飲む，スープを飲む，水・ビールを飲む」（take a medicine, have a cup of coffee [tea], eat soup, drink water [beer]）のように飲む物によって英語の動詞を使い分ける場合であるが，このような日英語の collocation の違いは，すでにさまざまなところで指摘され辞書の記述においても適宜注意が促されている。上述のように意味の透明性が比較的高い場合にはわかりやすいが，do や make のような透明度の低い動詞との collocation になると学習者にはわかりにくくなる。たとえば damage, duty, wrong, trouble, noise, excuse がそれぞれ do, make のどの語と連語関係にあるかといった場合である。damage, duty, wrong は do と連語関係にあるが，trouble, noise, excuse は do とは共起せず make と連語関係にある。

do a lot of damage　do one's duty　do wrong
make trouble　make a lot of noise　make an excuse

—*Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics*

さらに debt をコーパスで調べると次のような phrasal verb との collocation が高頻度で使われていることがわかる。pay off one's debt「借金を返す」, get [go / run] into debt「借金をする」, write off debt「借金を帳消しにする」。このような意味の透明性の低い collocation はコーパスによる頻度情報を規準に頻度の高いものを学習者に提示し，意識的に記憶することが大切である。

副詞の扱いは従来副詞の位置，quite と fairly のような類義語の用法の違いといったことに重点が置かれ，特定の語との連結によりニュアンスを伝えるような例にはあまり注意が向けられなかった。コーパスを検索するとある動詞，名詞，形容詞がきわめて高い頻度で副詞と共起することが明らかになる。たとえば，動詞 argue は議論の状況を伝える副詞，名詞 contact，形容詞 correct, different はそれぞれどれくらい接触，連絡があるか，どれくらい正しいか，どれくらい違いがあるかといった程度を表す副詞としばしば連結する。

動詞＋副詞　argue *strongly / forcefully / endlessly / passionately / fiercely* that....
副詞＋名詞　have *much / some / little / no* contact with...
副詞＋形容詞　*absolutely / politically / quite / probably / technically / perfectly* correct
very / quite / completely / totally / entirely different（違いが大きいことを強調）
slightly / little / no different（違いが少ないことを強調）

また，動詞 enjoy はしばしば really enjoy のように，副詞 really とともに用いられる。特に口語では3107例中267例，10％弱が really とともに用いられている。初歩の学習の段階からこのような連結に注意を向けておくことが自然な英語を使いこなすうえで大切なことである。

4. multiword units

二つまたはそれ以上の語がひとつのまとまりをもち，一群の語が一つの語彙素として働くときこのような語彙素は multiword units と呼ばれる (Schmitt 2000)。Moon (1997) は multiword units を multiword item と呼び，次のように分類している。(1) compounds (2) phrasal verbs (3) idioms (4) fixed phrases (5) prefabs。(1) ～ (4) はこれまでも教育の現場や辞書で取り上げられてきた。

compounds は二つ以上の語が結びついて新しい意味をもつ語である。(a) dog days「蒸し暑い時期」, (b) dog-tired「へとへとに疲れた」, dogfight「乱闘」(c) dog buscuit「犬用ビスケット」。これらの例のように compounds には 2 語が独立して並列している場合，ハイフンで連結されている場合，2 語が連結して 1 語に綴られる場合がある。また，意味の透明性におい

て違いがあり，(a) から (c) の例へと透明性が高くなっている。

phrasal verb は動詞と副詞あるいは前置詞が結びついて，意味的に一つの語彙素（lexeme）として振る舞う動詞句である。resemble, write, hire はそれぞれ take after, take down, take on のような phrasal verb で言い換えることができるが，意味の透明性が低いので学習者は注意して記憶することが必要である。また，phrasal verb のなかには rely on のように rely の全用例の95％が on と結びついているもの，give up（22382例）のように phrasal verb がきわめて高い頻度で用いられ，他の重要語と同様に取り扱われる必要があるものもある。Moon（1997）によれば，give up は address, adopt, airline, airport, appearance と同じ出現頻度であると述べている。

idiom は kick the bucket「死ぬ」のように，二つ以上の語からなり，語形や語順が固定化していて，kick, the, bucket の個々の語の意味から引き出せない比喩的，暗示的な意味を持ったものである。ここでも，for instance のように instance (instance@) 28232例中76％（21492例）が for instance として用いられ，学習上 instance の意味よりもイディオムの意味を優先するべき場合がある。

fixed phrases は Good morning, John. / Hold the line, please. / Out of sight, out of mind. のような挨拶表現，電話など場面に応じた定型表現，ことわざなどのことをいう。会話表現集などではこの種の表現がよく扱われる。

prefabs は lexical chunks (Lewis 1993), lexical phrases (Natigger & Decarrico 1992) と呼ばれることもある。本稿では lexical phrases を用いることにする。I suppose [guess / expect] (that) ..., I'm (really) fed up (with someone or something). などのように，ある談話の状況と結びついて，一つの単語のように機能する定型表現，決まり文句である。文字どおりの意味を残している点でイディオムとは異なる。Pawley and Syder（1983：192）は「普通の成熟した英語話者が知識として持っている語彙化された文（lexicalized sentence stem）の蓄積は何十万にもおよぶ」と述べている。ネイティヴ・スピーカーはこのような lexical phrase を無意識のうちに自由自在に使いこなしているが，コーパスはそれらの頻度とパターンを客観的に知ることができることから，学習にはきわめて有効である。以下，そのような例を見ておく。

まず，名詞 doubt を検索すると There is no doubt...の phrase が頻出することがわかる。そこで「疑いのないことを表明する脈絡で」どのような lexical phrases が用いられるかを検索した結果は次のようである。6417例中50例を示す。

there＋2no＋doubt[6)]

grouse in Thailand, as there is no doubt that they have a strong taste but I
Princess of Wimbledon, there is no doubt who is the Queen. <p> Last night,
and Walsh declared: `There was no doubt about it at all. Paul Parker took
game's organisers. <p> But there's no doubt he could reach it as, on the fifth,
boss Ball insisted: `There is no doubt in my mind Matt is one of the most
his early troubles. There was no doubt, however, that Faldo and Pavin, the
at the primary level, there is no doubt that class size does matter. And
his place in the world. There was no doubt about it, Olly's bearing was
areas," he said, `but there is no doubt that it helps to make the football
to the Secretary General. There is no doubt in the Secretary General's mind
at work this week, there could be no doubt as to their determination to catch
corruption adequately. There's no doubt Justice Wood's statement applies to
Stanley Jones said there was no doubt the crime was violent and
s eternal fate. `There can be no doubt that Dr Minor, though on occasion
a truly tragic case and there is no doubt that Mr and Mrs Phillips have
is their responsibility? There is no doubt they take on additional
is said to be in labor. There is no doubt that giving birth to a child is
Incompetence.' There could be no doubt that Kommunist went ahead and
Connolly now reports, there's no doubt that the Soviet military contains
reports now from New York. There's no doubt that the American people were
States, but of this there is no doubt the relationship between Mrs
process here. REP: There's no doubt that Peter Greenaway, with the help
dealing with a homer'. There's no doubt that Barber missed some skulduggery
<subh> Special </subh> There's no doubt that the track was running fast on
I was devastated since there was no doubt that it was my baby and started
her Royal in-laws. But there is no doubt in my mind now that these are two
the opportunity. There is no doubt it is the best stadium in the world
Borussia Dortmund. However there's no doubt about my favourite moment this
He couldn't look at me. There was no doubt in my mind that he would be found
partly right. There's absolutely no doubt that Republicans are busy playing
and unmistakably so there's no doubt in the minds of Bosnia's Muslims.
something doing at it there's no doubt the front wanted er re-building it
Korea were unparalleled. There is no doubt that this economic assistance
emotional involvement. There was no doubt this girl was genuinely distressed
by archaeologists. There can be no doubt that previous civilisations have
of the government. There is no doubt that the French government has
to be with you.' Oh yes. There is no doubt of that. At first, when she came
was imminent and there was now no doubt in his mind that we would be
left-wing PS. 5.55 a.m. There is no doubt about who are the elite. A couple
true interests lie, there would be no doubt that it should be the veto. We
get himself noticed, and there is no doubt that his claim to offer clear
as glamorising violence. There is no doubt that Kubrick had a misanthropic
credibility. While there are, no doubt, a few red faces at the way in
the job." For Nicholls, there was no doubt that Tizzard was the right man at
on long contracts, but there is no doubt that at some point they might want
selling and profiting. There is, no doubt, still a dangerous overhang of
54 f <FCH> <LTH> Although there is no doubt that, to be successful in the
the shot he did. Equally there is no doubt that it isn't the choice that
the apparent grains. But there's no doubt that something has gone badly
I said, `Yeah, well there ain't no doubt about who you are, ha ha ‖ <LTH

コンコーダンス・ラインから There is no doubt (that) … / There is no doubt in one's mind / there is no doubt about…のような主要な lexical phrases が得られるが，画面からもわかるように学習者がまず覚えるべき lexical phrase は There is no doubt (that) 節である。また no＋ doubt のみを検索すると，類似の意味で I have no doubt that Nigel will succeed brilliantly. のように I have no

doubt that…も頻出することがわかる。

It's time to…「もうそろそろ～する時間だ」は教室で習うおなじみの lexical phrase であるが，コーパスを検索すると更に詳細に頻度の高い lexical pattern を知ることができる。辞書や教室の例文では次のようなパターンを示すことが有効であろう。

It's time to go. / It's time to go home. / It's time to go back to work [school] etc.

It's time to move on.

It's time to get back to work [business] etc.

It's time to stop [start] -ing.

lexical phrases は談話をスムーズに進めるのに欠くことができない要素であるが，核となる phrase を中心にいくつかの高頻度の lexical pattern があることに注意を向けることが重要である。

5．おわりに

以上，語の連結を中心に日本人学習者が語彙を習得する際に気をつけるべきことをコーパスのデータを手がかりとして述べてきた。言語の習得には構造である syntax の理解と合せて lexis にも重点をおく必要がある。特に発信型の外国語学習においては語の意味を知るだけでなく，個々の語彙の振る舞いに習熟することが不可欠となる。これまでは，語彙の連結，パターンの習得は教授者，学習者の言語直感によっていたが，これからはコーパスの資料を用いることにより，より客観的に効率よく語彙を蓄積し語感を養っていくことが重要になってくるであろう。

注

1）Step1－学習指導要領で必修語とされている語，Step2－幼児・児童でも必要とする基本的な生活語，Step3－他の重要語のリストを分析して得た基本重要語，Step4－ Step1，2，3の語を除く，日本の教科書の収録語，Step5－ Step1，2，3，4の語を除き，一般によく用いられる語。

2）キーワード語（dangerous）をはさむ左右 3 語の位置に現れる語をそれぞれの列ごとの頻度順で表した画面。

3）RB＋ dangerous の RB は副詞を表す Tag。つまり，dangerous の前に副詞を伴う〈副詞＋ dangerous〉の連結を検索する。

4）believe @＋ NOUN | PRO＋ to＋ be の@は lemma のすべての形式 believe, believed, believes, believing を検索することを意味する。

5）is | was＋ believe＋ to＋ be＋ JJ の JJ は形容詞を表す Tag。

6）there＋2no＋ doubt の2no は there と no の間に来る語を 2 語の範囲で検索することを表す。

参考文献

Aitchison, J. (1997) *The language web*, Cambridge : Cambridge University Press

Carter, R. (1992) *Vocabulary,* London : Routledge

Halliday, M. A. K., A. McIntosh, and P. D. Stervens (1964) *The linguistic Sciences and Language Teaching*, London : Longmans

Lewis, M. (1993) *The Lexical Approach* Language Teaching Publications

文部省　高等学校学習指導要領解説　外国語編　英語編（1999）東京：開隆堂出版

Moon, R. (1997) 'Vocabulary connections : multi-word items in English' *Vocabulary*, eds. by Schmitt, N. and M. McCarthy, Cambridge : Cambridge University Press

Nattinger, J. R. and J. S. Decarrico (1992) *Lexical Phrases and Language Teaching*, Oxford: Oxford University Press

Palmer, H. E. (1931) Second Interim Report on Vocabulary Selection Tokyo : IRET

Pawely, A. and F. Syder (1983) 'Two puzzles for linguistic theory : nativelike selection and native fluency' eds. by Richards. J. and R. Schmidt, *Language and Communication* London and New York : Longman

Richards, J. C., J. Platt and H. Platt (1992) *Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics* Edinburgh: Longman

Schimitt, N. (2000) *Vocabulary in Language Teaching* Cambridge : Cambridge University Press

Thorndike, E. L. and I. Lorge (1944) *The Teachers Word Book of 30,000 Words* New York : Teachers College, Columbia University

West, M. (1953) *A General Service List of English Words* London : Longman

辞書

Collins COBUILD English Dictionary (1995) London : Harper Collins

Longman Dictionary of Contemporary English (1995) London : Longman

ニュープロシード英和辞典（1994）東京：ベネッセ

ジーニアス英和辞典（1994）東京：大修館書店